

〔費孝通先生追想特集〕

佐々木 衛(著)『費孝通—民族自省の社会学—』東信堂

2003年10月20日発行 (シリーズ 世界の社会学・日本の社会学)

Book review: SASAKI Mamoru “FEI Xiaotong—Sociology for Self-Help of Chinese People”, published by Toshindo-press, Tokyo 2003

河 野 眞

KONO Shin

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail: takakons@vega.aichi-u.ac.jp*

2005年4月24日に費孝通博士が亡くなれたのは悲痛なことである。逝去の1年半ほど前に刊行された本書は、その学問世界の全貌を窺う上で貴重な案内である。専門にやや距離があり、故人とは直接には面識を得なかったが、弟子にあたる中国の研究者には長年付き合いがあつて、今回も、博士の高弟で現在の同僚でもある周星教授からの勧めで、本誌の小特集に関わることになった。したがって本書を論じるのに向いているとは自分でも思えないが、そうではあれ、これは、人類学や民俗学や社会学に関心のある者には、強い刺激を感じずにはおかない人物への手ほどきなのである。

私のような一般読者にとって先ず有り難いのは、本邦ではなお未訳を多く残す費孝通博士の著作に広く目配りがなされ、解説がほどこされていることである。重要著作の翻訳がかなり増え、それぞれの訳書が解題を併せもつものの、なお情報の空白は少なくなかった。本書が、重要著作のみならず、細かな資料をも駆使して隙間を埋めてくれた意義は大きい。

さらに、これまた啓蒙を受けた点であるが、費孝通博士と西洋の学問との関係については要領を得た案内がほどこされている。博士がマリノフスキーに師事し、またそれに先立って北京でロシアの民族学者シロコゴロフに学んだことはよく知られているが、本書では、アメリカのルース・ベネディクトとマーガレット・ミードから費孝通博士がいかなる

刺激を得て、それが独自の理論構築にどのようなつながっていったかを解明している。それは裏返せば、中国の知識人とアメリカとの関係でもあり、またその点への本解説者の関心でもあろう。

これからも窺えるように、本書は経歴を概観しただけではなく、費孝通博士の理論世界への案内書である。なかでも、第二章「費孝通の社会学理論」は大変役に立つ。特に日本語では読めない『郷土中国』やそれに関連した諸作における博士の理論がまとめられているのは刺激的である。〈差序格局〉の概念を中心として、〈社会圈子〉、〈自我主義〉、〈礼治秩序〉、〈教化権力〉などの術語を解説しながら、博士が中国の基層社会を理論的に把握された様子を分かりやすく説明している。これを説いた博士の関連著作はかなり込み入ったもののように見えるので、よほどよく咀嚼されているということであろう。因みに、その箇所を部分的に引用すると、次のような論述が見える。〈郷土社会の構造のもっとも中核をなす概念が「差序格局」である。西洋の集団は、メンバーシップが明らかで成員と非成員の境界が歴然としている。これに対して、中国の社会関係は己を中心に同心的に広がるのみで、集団の分限は模糊としているとい。誰もが社会的なつき合いの圏の中心に位置しており、つき合いの波紋を外へ押し広げている。……社会的ネットワークの範囲はその中心に坐している人物の勢力が変化するのに応じて伸縮する可変的な構造で、勢力を誇示する時には関係は広く密になるが、勢力が縮小すると人々は離れてゆく。中国人が世間の人情の厚薄にとくに敏感なのは、社会的なネットワークが状況によって伸縮することに起因していると、費孝通は説明している。〉この要約の前後を私は反復して読んだが、それは、時折中国の人と接し、彼らが大陸的とか、悠揚として迫らぬ大人の風格などといった一般の先入観や言い回しとはかなり違って、奥深いところで神経質で、またその神経の向く先が日本人とは方向が違うようだと感じていたからで、それが理論的な説明されたからである。自国民の心理の特徴を社会の仕組みとの関係で構造的に把握し、またそれを独創的な術語で表現した費孝通博士の研究のレベルの高さも、改めて認識させられる。これは、同じ第二章での、小城镇に関する博士の理論にも感じることで、すでに行なわれている博士の著作の邦訳と照らしあわせても、本書の要約は適格で分かりやすい。

第三章「現代社会学と費孝通」は、ひろく国際関係と学史のなかに博士の主に後半の活動を位置づけており、これも視野を広げてくれる好解説である。と言うより、「費孝通研究の今日的意義」の一節も入っているように、本書の著者の独自の課題設定でもあろう。

本書が手軽に読める分量の著作であることも読者には親しみやすい。駆使された資料からだけでも、大部な解説書となっても不思議ではないだけに、簡潔で平明であることに、著者の並々ならぬ工夫が窺える。